



8月大熊D班

原発事故の影響と相互理解の難しさ

新名映太 郡司祐輔 光部優太 カミジシェイラ美桜 市橋和子

目次

1. 自然科学面での学び
2. 安全と安心の狭間
3. 被災した小学校／老人ホームを訪れて感じたこと
4. 交流会で分かったこと
5. 町の未来について
6. まとめ

目次

1. 自然科学面での学び
2. 安全と安心の狭間
3. 被災した小学校／老人ホームを訪れて感じたこと
4. 交流会で分かったこと
5. 町の未来について
6. まとめ

意味ある測定値を得るための取り扱い

試料採取・整理

- コンタミネーションを防ぐ

数値表現

- $\pm$ 不確かさの意味: 同じ方法で区間を多数作ったとき、一定割合で母平均を含む区間があることが期待される
- 有効数字は不確かさの桁数と一致させる

例: 13543 ± 429 [Bq/kg] $\rightarrow (1.35 \pm 0.04) \times 10^4$ [Bq/kg] (1桁丸め)

解釈・考察における反省①

30 cmライナー実験

古タイヤの下と横で ^{137}Cs の濃度比較

手前のタイヤ下と50 cm横で採取



①考察の材料不足

タイヤの年代を調べなかった

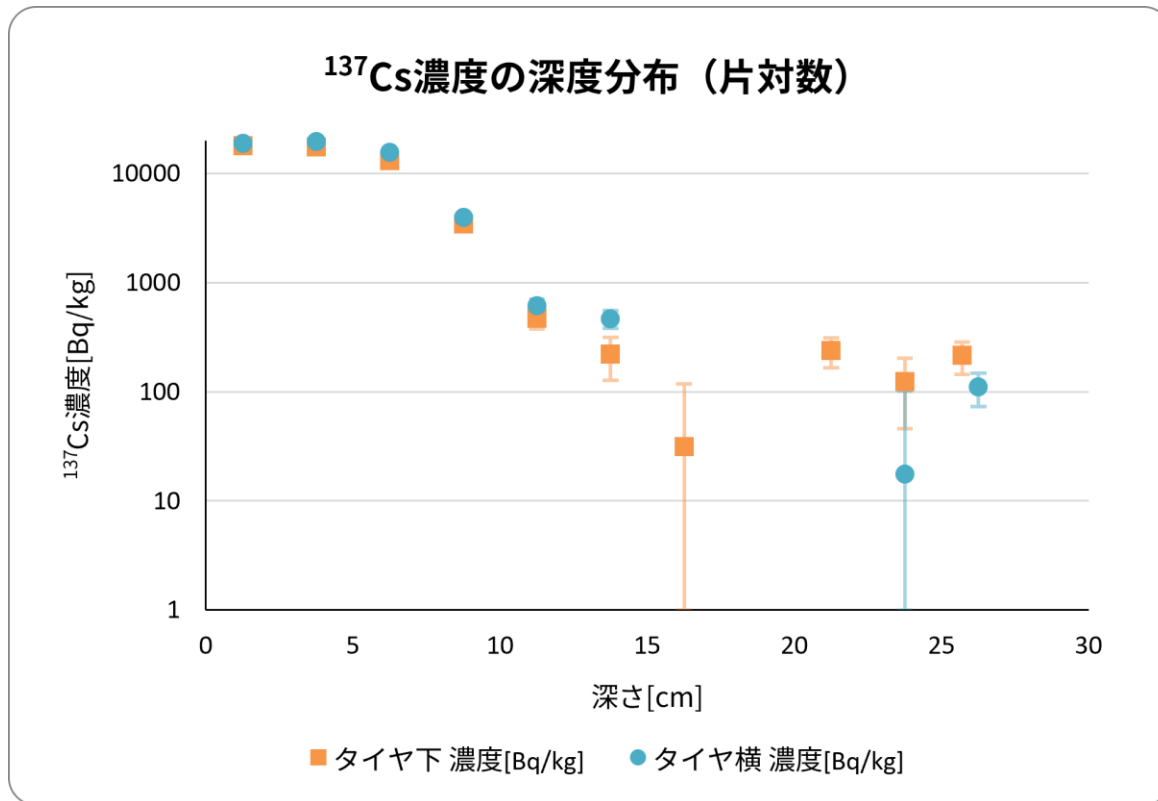
➤放置時期が震災前かによって
考察が変わる

タイヤ下からライナーサンプルを採取する様子



解釈・考察における反省②

②濃度比較の基準を倍率ではなく絶対差としていた



※下側誤差が負となる場合は軸下限で表示を打ち切り

まとめ・2への接続

1のまとめ

一つの意味ある測定値 ⇒ 科学的に適切な判断



2. リスクコミュニケーションの観点

そのような科学的情報は、実際の社会で安心につながるのか？

目次

1. 自然科学面での学び
2. 安全と安心の狭間
3. 被災した小学校／老人ホームを訪れて感じたこと
4. 交流会で分かったこと
5. 町の未来について
6. まとめ

Q. 科学的な情報は、実際の社会で安心につながるのか？

「安全」と「安心」の狭間

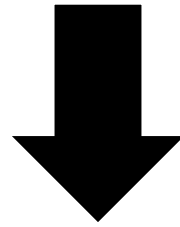
Cグループ: 中間貯蔵施設

- 放射線へのイメージ
職員と住民の間で理解度にかかなりのギャップ
- ↓
- 安全を安心に繋げるには互いに相互理解する必要がある
 - 互いの立場の違いにも起因

Dグループ: 廃炉研究

- 何よりも安全性が最優先
放射線の可視化による作業員の安全性の確保
- 安全を伝える≠安心を伝える
安全だと伝えてもそれで安心してもらえなければ意味がない

Q. 科学的な情報は、実際の社会で安心につながるのか？



A. それだけで安心につながるわけではない

目次

1. 自然科学面での学び
2. 安全と安心の狭間
3. 被災した小学校／老人ホームを訪れて感じたこと
4. 交流会で分かったこと
5. 町の未来について
6. まとめ

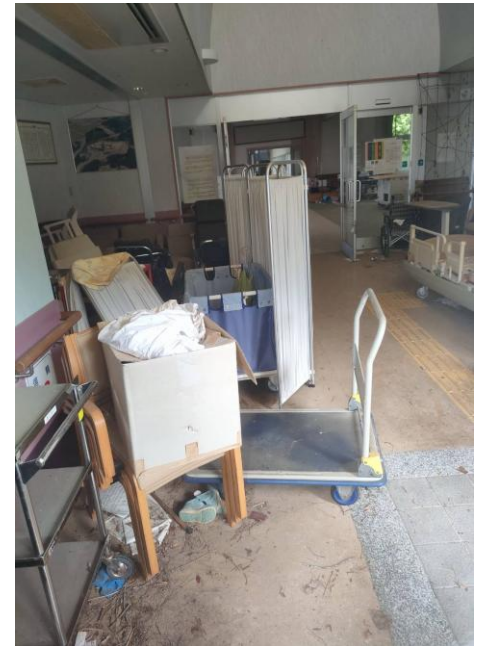
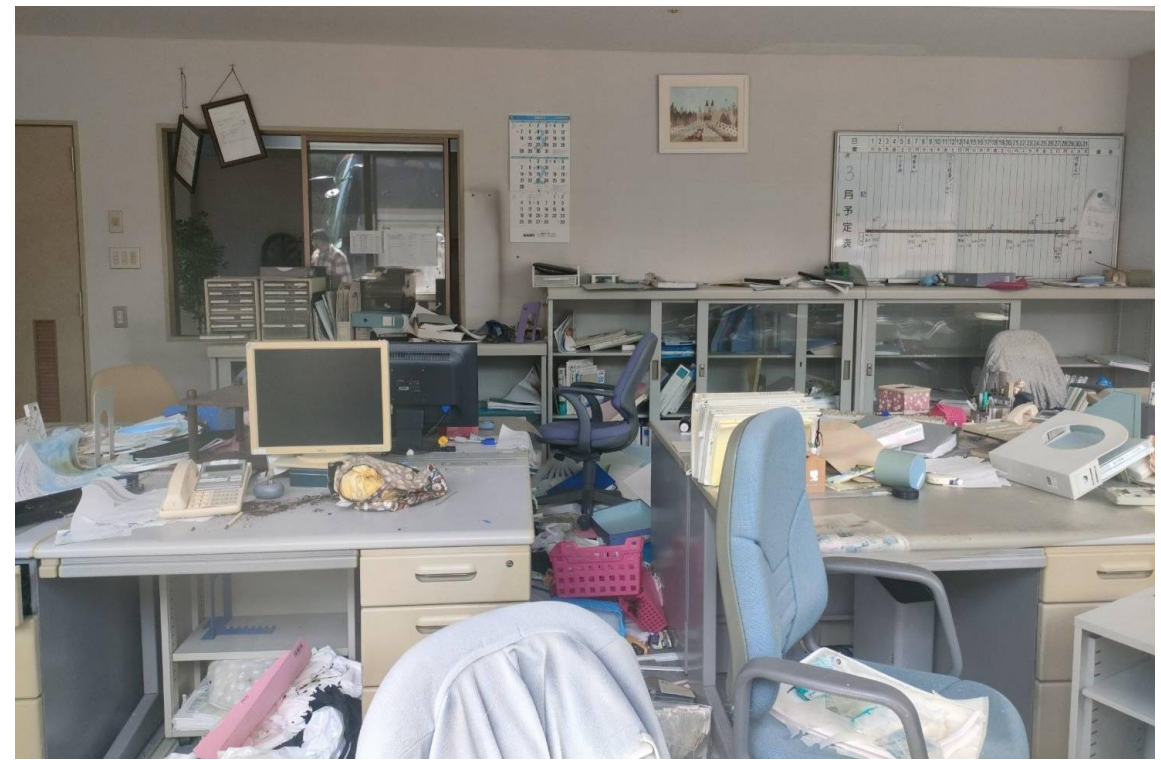
【小学校】

- 残されたモノや景色から
「あの日」の悲惨さを目の当たりに。
 - リアルな保存状況 e.g.) 残された教材、自転車etc...
 - 何も持たず急いで逃げた姿が思い起こされるほど
 - 避難した際は、「数日で戻れるだろう」と思っていた。



【老人ホーム】

- 上着すらもそのままだった
→ 入居者の方々を避難させることで手一杯だったのでは。
→ 「2,3,日で戻れると思っていた」ことの裏付け
- 書類や壁が色褪せている/パンクした車のタイヤ
→ わざと保存している意義



目次

1. 自然科学面での学び
2. 安全と安心の狭間
3. 被災した小学校／老人ホームを訪れて感じたこと
4. 交流会で分かったこと
5. 町の未来について
6. まとめ

交流会

Aグループ 松永秀篤さん 根本友子さん

- ・根本さんは中間貯蔵施設建設のために、自身の農地も家も会社もあつた土地を受け渡した地権者の方

「先祖代々苦勞して増やして守ってきたこの土地を私がすべき跡継ぎをせずに手放してしまっていていいのか」

「契約前夜は泣きとおした」

⇒中間貯蔵施設を建てるまでの各工程でいろんな方々の葛藤や我慢がある

松永さん「同じ福島県内でも地域によって賠償金の額が異なったり、賠償金が支給されなかったりしたため、福島県民の間で『いがみ』があった」

松永さん 環境省の人に対して、
「恨みはあった。人ごとの様に話すから。」

根本さん「事故は終わってないよ、まだまだ」

⇒当時にも現在にもある人と人との関わりの難しさや、残されたままの課題があり現在進行形である

目次

1. 自然科学面での学び
2. 安全と安心の狭間
3. 被災した小学校／老人ホームを訪れて感じたこと
4. 交流会で分かったこと
5. 町の未来について
6. まとめ

町の未来について(住民の思い)

町への帰還

戻りたい

- 元の町を取り戻したいという気持ちは当然

戻らない

- 高齢になり農業は厳しい
- 世帯分離すると簡単には戻らない

町のあり方

- ・絆の強い町だった
- ・全く変わってしまった
- ・町全体が縮小した



- ・家族で住める町に戻ってほしい
- ・住みたいと思う人がいれば来てほしい

残してほしいもの

- ・所々にあった仏様、神様を残してほしい
- ・震災遺構は意味をもって残すべき



町の未来について(新たな問い)

- 数字だけじゃない、人の感情に寄り添うことの難しさ
- 目的に関わらず、住む人を増やすことの必要性
- 変わっていくしかないのか
- 持続可能性について



まとめ

1. 震災は現在進行形
2. 異なる立場・意見でのコミュニケーションの困難さ